

本論文は、十九世紀後半から二十世紀の初頭にかけて、パリとその郊外の市区庁舎に設置された装飾画に「人生の諸段階」の絵画主題が多くみられることに着目し、その背景となった社会的な状況を分析するとともに、この主題の装飾画を通して展開された同時代の美術の諸相を明らかにしようとする試みである。

誕生から死まで、人の一生を数段階に分けて絵画化する人生の諸段階の主題は、古今東西の美術にみられるが、とりわけ十九世紀末西欧の美術においては、この時代に新たに芽生えた生命への関心と融合し、さらに連作やフリーズの形態の流行と並行しながら多数の作品に表された。十九世紀末を対象とした従来の研究では、文学や音楽など多彩な芸術にわたって展開された生命の循環や人生の諸段階のテーマについて、世紀末の象徴主義の芸術潮流という観点から関心が向けられてきた。それに対して、象徴主義の潮流を担った画家たちにより、この主題の連作や横長の画面の壁画がフランス第三共和政前期の市区庁舎のための装飾画として制作されたが、その表現が市区庁舎の役割をはじめとする当時の政治社会の動向とどのように関係したかという側面は十分に議論されてこなかった。第三共和政の公共装飾の研究史においても、市区庁舎という中小規模の世俗の公共建築の装飾の意義は等閑に付されてきた。本研究では、近代の文化的遺産としての庁舎装飾の見直しに寄与するとともに、看過されてきた社会的、政治的な側面を明らかにすることに取り組んだ。

人生の諸段階の主題は、フランス第三共和政のもとで整備されたパリとその近郊の市区庁舎の内部装飾の中に「共和国の勝利」や「自由・平等・友愛」と並んで頻繁に見出される。こうした主題が表されたのは、市区庁舎が市民の誕生や婚姻、死を登録し、管理する機関、すなわち市民を共和国の制度の中に組み入れる役目を果たした機関であることと密接な関わりがある。市区庁舎の装飾画において人生の諸段階の絵画主題は、市民の一生を共和国の象徴や伝統的な寓意を掛け合わせながら絵画化した。この主題がとりわけ市区庁舎の婚礼の間装飾のテーマとして重宝されたのは、婚礼の間が教会婚に対置される市民婚の挙行の場であり、その装飾画は来訪者への共和政理念の伝達を担っていたからである。本研究ではこれらの装飾画を分析することにより、第三共和政前期のイデオロギーと図像の間の緊密な結びつきを具体的に考察した。さらに人生の諸段階の表象についての実証的な検証に基づいた分析を行うことで、当時のジェンダー観や家族観、人生観をめぐる様々な議論を浮き彫りにし、現代的な視点からそれらを見直すことを目指した。

以下の各部において、個々の装飾画が公のコンクールやサロンという発表の場を通じて、第三共和政下の社会でいかに受け取られ、どのような役割を果たしていたかという受容の状況を注文と制作の経過とともに詳らかにした。

第一部では、第三共和政初期の体制の揺れ動きに伴う市区庁舎装飾の動向を明示するとともに、その後の人生の諸段階の主題の出現に繋がってゆく「法」と「共和国」の寓意像が最初期の区庁舎装飾として注文され、設置されることとなった経過を論じた。民法典に規定される市民婚を象徴するという特定の役割を有した装飾画は、法の寓意とフランス共和国の寓意を重ね合わせ、市民の婚礼を司る寓意像という姿を提示していたのである。このように明快であるが非常に限定された意味を担った市区庁舎装飾

画は、1880年代に装飾事業が本格化してゆくにつれて、第二部に論じるように、大革命と古代ガリアという歴史の表象と重ね合わせた市民の人生に、共和政の市民倫理を託した人生の諸段階の主題を展開した。第二部では、それらが過去の場面を舞台とする構想でありながら、革命期の国民祭典や志願兵、あるいは古代ガリアの兵士や家族という描写において、普仏戦争後のナショナリズムと家族観という第三共和政期に固有のテーマを提示する特質をはらんでいたことを明らかにした。

第三部第一章では、従来「市民婚」という市区庁舎装飾特有の主題を写実主義と共和主義の文脈において描いたことが知られてきたアンリ・ジェルヴェクスらの連作を中心として、その芸術及び政治傾向の一方向的でない複雑な絡み合いを明らかにするとともに、共和政の労働者教育や福祉などの諸制度が人生の諸段階の主題に組み込まれてゆく新たな展開を紐解いた。また第二章では、第三共和政期の都市住民の需要に沿った農民表象が市区庁舎装飾の人生の諸段階の主題に用いられてゆくことを明らかにしながら、それと同時に現実的な郊外や普仏戦争の記憶と結びつく描写が人生の諸段階の主題に組み込まれ、第二部とは異なった外観によりナショナリズムと家族観のテーマもなお展開されたことを論じた。

第四部では、以上のように市区庁舎装飾において市民倫理との緊密な関係の中で描出されてきた人生の諸段階の絵画主題が、1880年代後半から世紀転換期にかけて近代絵画の動向としての象徴主義の潮流との絡み合いを生じる中でいかに展開されたのかを論じた。ここでは、人生の諸段階の主題の中心に据えられた「慈愛」という伝統的な寓意の表現がなおも必要とされて、共和政下の社会における家族と母子をめぐるイデオロギーの伝達にも大きな役割を果たしていたことが明らかとなった。

以上の議論を通じて、市民倫理を中心に据えた市区庁舎装飾画における人生の諸段階の主題のあり方を明らかにした。この主題の装飾画の展開は、次第によりパノラミックなイメージを見せてゆきながら寓意画や歴史画、風俗画といった伝統的な絵画のジャンルを混淆させるとともに、多様な属性の芸術家の公共装飾への参入を招き、ひいては世紀転換期から二十世紀初頭にみられるようになる従来と異なる女性表象や女性芸術家の実践にも繋がる新たな公共装飾画のあり方を導くものであった。